上今井遊水地整備事業に伴う発掘調査

南大原遺跡（みなみおおはら） 現地説明会 資料

令和7（2025）年11月15日（土）

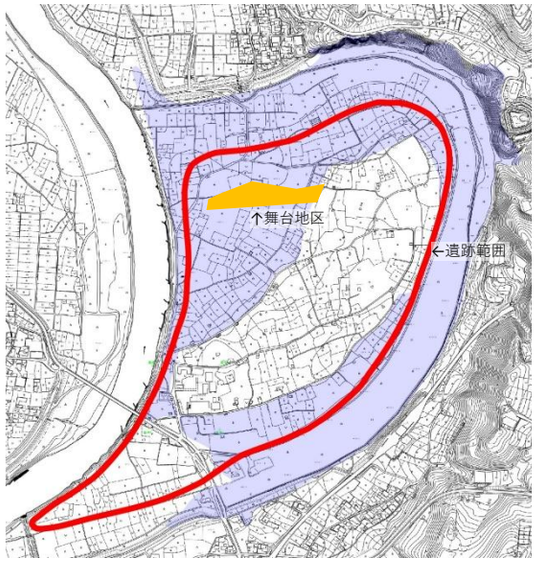
主催：（一財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
協力：（公社）日本文化財保護協会

舞台地区遠景（令和７年10月　南西上空から）今回ご覧いただく調査区

《調査の概要》

上今井遊水地整備事業に伴う南大原遺跡の調査は、当センターが令和５(2023)年度から実施しています。今年度は、南大原地区と北大原・舞台地区の２地区で調査を行ってきました。

今回は、南大原遺跡の北西に位置する、舞台地区の成果を見ていただきます。調査面積は11,000㎡に及びます。



《調査の成果》

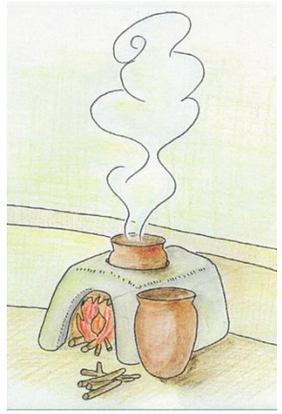
竪穴建物跡65軒、掘立柱建物跡２棟、木棺墓１基、溝７条が検出され、この他にも柱穴や土坑が数多く検出されています。これらの遺構は、いずれも平安時代に位置付けられるものです。特に以下の３点が注目されます。

1．竪穴建物跡が65軒と、非常に多くみつかったこと。
2．有力者の墓がみつかったこと。
3．多くの注目すべき遺物が出土したこと。

«65軒の竪穴建物跡»

65軒の竪穴建物跡は10世紀前半と11世紀後半の２時期に建てられたものです。短い期間で位置をずらして立て替えられた跡があるので、すべてが同時に建っていたものではありませんが、10世紀前半のある時期には30軒以上の建物が建っていたものと考えられます。

一般的な竪穴建物内にはカマドがありますが、カマドがない建物もみられました。そのような建物には床に火を受けた痕(炉跡)があることから、鍛冶などの工房として使われていた可能性が考えられます。



カマド復元図

«有力者の墓の発見»

この集落をはじめに開発した有力者が葬られたと思われる墓が１基、竪穴建物跡のすぐ近くでみつかっています。

遺体が木の棺(ひつぎ)に入れられて埋葬され、人骨・歯が残っていました。特に、歯については、歯並びがわかる状態で出土しています。また、木棺の外側には、黒色土器・土師器の食器類が数点副葬されていました。

«注目すべき遺物»

有力者でないと持つことができない土器や金属製品が出土しています。土器では、緑釉陶器や灰釉陶器が特出されます。この他「開」字状に施された暗文(あんもん：光沢のある線状の文様)の見られる黒色土器も出土しています。

金属製品では、銅製の八稜鏡(はちりょうきょう)・鉄製の馬具・鉄鎌等の出土が特筆されます。

《まとめ》

平安時代の大規模な集落であることが明らかとなりました。文字資料には当地にこの集落の記録はなく、調査前の段階では全く予想していませんでした。千曲川流域では最北部にある、大規模な平安時代の集落が新たに発見されたといえます。

南大原遺跡舞台地区概略図